

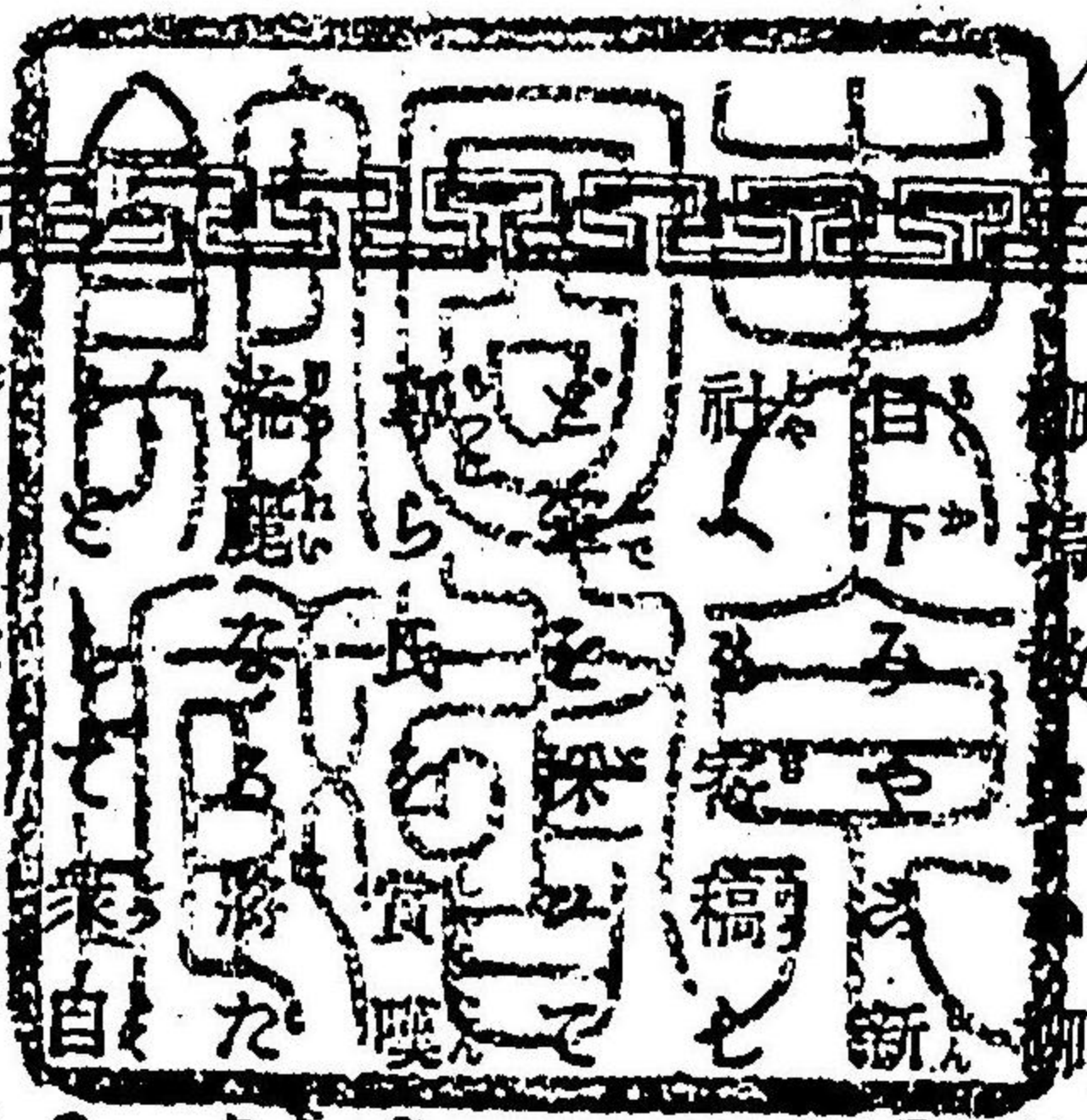
1867

特 13

754

猿
申





猿 曳序

能く人情に通ずるのみならず文詞の妙用に至りては感
 として一話柄を作り出せしものなり余之を一讀するに
 時流行の速記法に習ひ氏が筆頭に於て一足の猿を主人公
 とし、その猿を主として、自を叙するの簡明なるに及ばず、實に奇々快
 然る人、多し然れば、其著述に係る者、文章の
 老者も及ばず、とて現時新聞記者中にて
 新作の小説を掲ぐ年未だ三十路を出ぬ
 新聞社にて筆を其紙上に採り、傍ら江戸新聞
 鳩亭寅彦氏といふ作者にて、余が知人なり









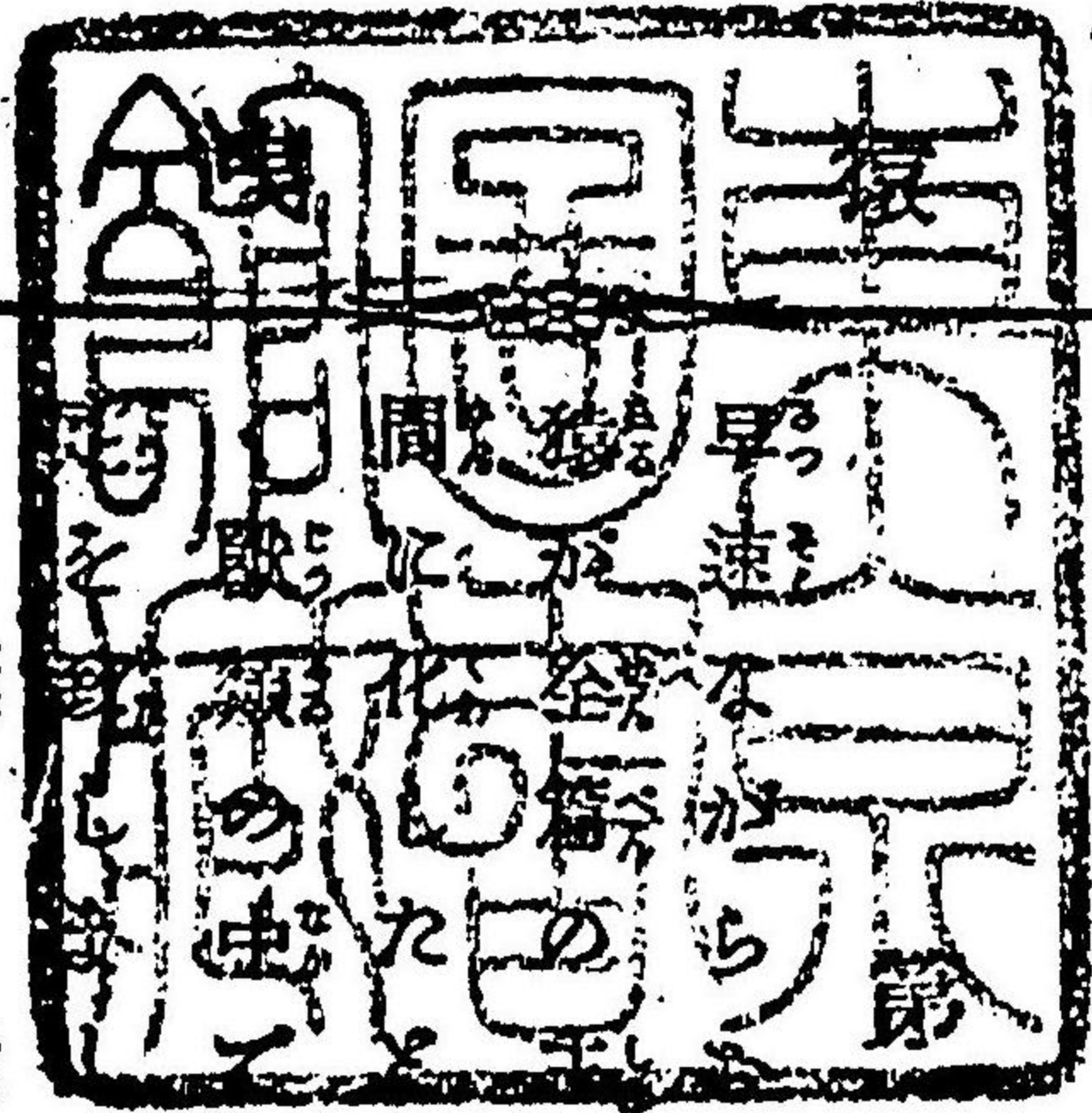
嘆其度を知らず余是に於て氏に請ふて印行に附さん
とを求む氏曰く此書拙くして閱るに堪ん希く止めよ
と余又請ふて遂に其諾を得もて公けにす夫讀者よ此
彦氏が甘んずる作ならぬと其情態に於るの一話なれど
圓朝氏の口演に係る説話の速記に劣らざる一話なれど
刊行の後ち發兌の日を待ちて只管求めあらんことを
序文に換へて願ふ者の

時に明治廿有二年

しわすの中旬

小説館の主人にあう

時 13
754



● 猿 曳

柳 鳩 散 史 稿

七

敬者てとさいます扱お話しの發端の今を距ること七年以
 楚人の沐猴にして冠すどやら何に付ても引合ひの多い愛
 ふお話しに餘り當にもなりませんが大開の顔の猿の如く
 毛が三本足りないので猿になつたと云
 一 番人に近い者の猿て御座いますや誰か掛
 申す一種の説が有るさうですが夫の兎も角
 人公でとさいます勿論西洋の方で猿が人
 目に懸るお話しに猿曳と題しまして一匹の
 一回

前明治十五年の二月初めでも御座いませうか箱根邊の三
 寸餘も雪が積りました寒い時分とて七湯とも湯治客は一
 人も無く火が消た様な湯本宿の片側に五平太と申す狩
 夫が御座います今宵も鐵砲を擔いで出懸ますと都合よく
 小が御座います女猿を懸留たので好しや一匹でも獲物が
 有れば雪を胃して稼ぐよりも早く歸つて寐酒でも飲まう
 と降り積む雪を踏分ながらトボくど歸つて來ました(五)オ
 イ嗅アどんや歸つて來たよ何しろ寒いから疾く開て呉ん
 なオ、寒い頬べたが切れるやうだ(女)オヤお歸りかエ大層
 早かつた事ね(五)ウン好い鹽梅に出ると間もなく猿を一
 匹獲たから其儘引返して歸つて來たソラ見ねへ大きなも
 んだ(女)オヤ、まア此猿ハ六ツ七ツの子供位もあるだ

らう子(五)雨うよ素敵に大きなるんだオイく噂アどんや
 見りやア草鞋が脱いで在るが誰ぞ来なすったか(女)アノ子
 何があ出だア子那のソラ東京の彌次郎さんが(五)エ彌次郎
 さんが来なすったとへ其奴ア如何もお珍らしいが此の雪
 に大變だッたらう直ぐにお目に懸るから俺が歸つた事を
 知らせて呉んね(女)ダガ子お前さん彌次郎さんの草臥た
 と云て奥の間に寐てお出だから起すつても氣の毒じやア無
 いか急用がある譯でも無いから目が受たら好いが何なら
 明日の朝の事におし(五)成程其所もあれば蓋も有りだ其
 様なら明日の朝逢ふとして寒さ凌ぎに一杯遣りてへが酒
 のあるだらう(女)アイヨ彌次郎さんに出したお酒が半分
 ほど残つて居るから夫だけで我慢するだらう子(五)筥棒め

此の雪に買ひに行けたア云ねへから先ッ潜りを倣なくッ
 ても好いと困爐裡に鹿菜をコテくど押込み高胡座で始
 めますと空腹だから直きに酔が廻りましたお株の管でも
 巻れての客の手前も面目ないから女房は氣合を謀つて煎
 餅の様な穢ない蒲團を敷き直ぐに五平太を寐かした機轉
 は永年連添て居る甲斐があつて好く吞込んだもので御座
 います雪の段々降積つて夜のシンと更渡りチヨロくど
 音のして居た庭の寛の松ケ枝の類雪に埋もれたと見えて
 車音も絶に折々窓を打つ吹雪がサラくど聞ゆるはか
 り昔て云ふ丑三ツの頃になりすど五平太の漸次に酔が
 醒めて頻りに咽喉が渴きますから臺所に行つて水を飲うぞ
 夜具を剝除て身を起すと次の間の方で妙な物音が致しま

第二回

すマサカ斯んな家へ泥坊が遣入りもしまいハテ不思議だ
 と思ひますから徐々寐床を遣出し壁の側に摺寄つて五分
 ばかり紙門を開け暫らく覗いて居ましたが如何した譯か
 酷く驚ろきました
 五平太の吃驚して不思議くど申しながら再び紙門の間
 から覗いて見ますと窓の側に四足を擦められ獸肉屋の店
 の様にブラ下つて居る親猿の下に何處から忍込みました
 か可愛らしい子猿がゑろくど泣いて居ります焼野の雉
 子夜の鶴と古い文句にある通り四足でも虫けらでも親子
 の恩愛に變りはないものですが其所が獸で御座います子
 猿の親猿が鐵砲に撃れ最う死んで居るとの知りません唯

縛られて居ると思ひますから側にあつた飯櫃を踏臺にして
 て親猿に取絶りますと永の様に冷切て居るので子猿は左
 も驚いた様な顔をして急に飛下り燃残つて居る圍爐裡の
 火に自分の手を焙つての親猿を煖め温めての手を焙つて
 居る様子如何なる鬼ても涙が溢れます五平太も根から
 の狩夫でい無くマッサ物の哀れを知らぬ様な残忍無
 の男でいませんが未だ酒氣が残つて居るから突
 鐵砲を引寄せたものゝ弾込をする隙もなく殊には高の知
 れた小猿一匹手捕りにして呉れやうと思ひましたから疾
 の如く飛んで出ますと子猿は吃驚して壁の隅に躬を縮め
 人間の様に手を合せて頻りに五平太を拜んで居ります前
 申し上げました通り此方の酒氣を帯びて居る事ゆゑ用捨

なく首筋を攫んでクルく巻に擦めました此の物音に奥
 へ寐て居る彌次郎も飛んで出れば女房も周章て駈出て女
 モシお前さん如何したの(彌)五平太さん何事だ泥坊でも遣
 入りましたかど左右から尋ねますと五平太の手を打振り
 (五)何サ何んでも有りませんが宵に仕留た猿の子が何處か
 ちか忍び込んだやら取捕まへて遣た所サ(彌)それの實に不
 思議な譯だが如何して人家へ猿なんぞが遣て來たのか奇
 妙な譯サ子(五)サア彌次郎さん聞て下せへ斯ういふ譯だト
 云ひながら始終の様子を話さうと思つて氣を鎮めた時始
 めて猿の了簡を考へるとフツと愕然になつたと見ゆホロ
 くと涙が溢れました(女)オヤお前さん何を泣くの可笑し
 な人じやア無いか(五)何だ可笑しな人だとヤイ此の阿魔ア

人情を知らぬへから冗だア考へて見る是れが泣ずに居られるものか手前も人間なら泣け(女)ダツテ前さんが分らないじや(五)無いか唯泣うと思つたッて泣れるものかねオホ、(五)オヤ此の女の笑やアがるな太へ奴だ其様な人情のねへ女の一日だッて自宅に置れぬへから出て行け太へ奴だ(女)何だへ妾を追出す氣かへ成程妾が密夫をしただか悪い事をしたとか追出される廉が有れば随分出て行きもしやうが譯も云ずに泣ないから出すと云ても出て行れるものじやア無いや子馬鹿く、い何の事だ(五)ナ馬鹿だと篋棒めエ手前おそ馬鹿だから人情といふ物を心得ぬへじやア無いか返すも太へ阿魔だノウ彌次郎さん爾んなもンじやア有るまいか(彌)爾んな物にも斯んな

第三回

物にも自己にやア譯が分らぬへマア好いから兎に角も前が泣く譯を話しなせへ道理の事なら自己も突合ひに泣かうじやア無いか夫でも内儀さんが泣ぬへ日に自己も力を添へて追出す分の事サ(五)違へぬへ其の通りだ餘ンまり可哀さうだから俺にやア話せぬへが話さなきやア分らぬへからマア聞いて呉んなせへと最前からの様子をコソくだど話ししますと彌次郎も女房もシクくど泣出しました

(五)女房出来た能く泣いた夫ほど物の道理が分れば頼まれても雌縁のしぬへ未來永々夫婦だから心變りをするよ承知しぬへぞ(女)何だぬへお前さん身につまされて泣て居

るのに混肴返さずとも好じやア無いか此の中で串戯を云ふ様で親が死んだ日に洒落も云ひ兼まい其様な人に連添て居ると行末が案じられるから今度は妾の方で暇を貰ひますハイ出て行くから離縁状を書いて下さい(彌)コソサ如何したものだ鮎子ツ子の離縁沙汰何時まで云ても論が乾ねへうら大概にして置いて那の子猿を如何か倣なさい縛つて置いちやア可哀さうだ(五)成程彌次郎さんの云ふ處ろが道理だ直ぐに繩を解て逃して遣るから嗅アどんや何ぞ喰させて遣んねへ(女)爾うさねエ何にも無いからお飯にお鯉節でも懸て遣うか夫とも天藝でも嘗させたるのか子(五)間拔めエ猫が煩らやアしめへし天藝を嘗させる奴があるものか酒でも飲して遣んねへ(女)オヤ猿がお酒を

飲むかへ(五)違へねへ龜の子と間違へたト大騒ぎをして繩を釋ましたが子猿の逃やうともせず小さくなつて坐つて居ります(女)ア御覽ナあれだものを繩を釋いたツて逃やうともせず温順しく坐つて居るとい何てエ可愛らしい猿だらうねへアノちよいとお前さん逃したツて逃ないから寧ろ自宅へ飼てお遣りナ(五)往ねへよ冗だよ(女)如何故往ない(五)何故ツてお前夫りやア冗だ一跡お前が浮氣ッばいから何をするか知れやア倣ねへアハ、、(女)アレン申戯じやア無いよ餘まり可愛さうだからサ(彌)イヤ内儀さん失禮だが此の彌次郎が中へ這入つて斯いふ事に致しませう(女)ハイ何卒爾して下さい(五)何だなア此女は未だ何とも仰しやりは倣ねへフン成程夫れから(彌)俺も最前から

の様子を見て實に感に堪へませんでした就ては餘まり可愛らし
 いから此猿の俺が貰いませう併し俺も御存知の通り裕福
 な活計では無く何とも付ぬ際物師で月日を送るといふば
 かりお負に女房が産をして口が一人殖たに付き益々米櫃
 がガツついて遣線のつかない所から沼津に居る親戚の者
 へ幾許でも拵へて貰はうと態々出掛て見たところ何處も
 同じ秋の夕暮で俺の顔を見るが否や如何か工面は出来め
 へかど反對に毒氣を吹掛られ臆を潰して歸る途中お前方
 へ泊つた様な情ねへ仕義だから猿を飼へば飼つたいけに
 物入の嵩む譯だが此場の様子を見た上は爾んな事も云て
 居られめへ思切て貰ひませうよ(五)難有てへく爾うして
 下さりやア俺等夫婦も安心と云ふものだ今もお前さんが

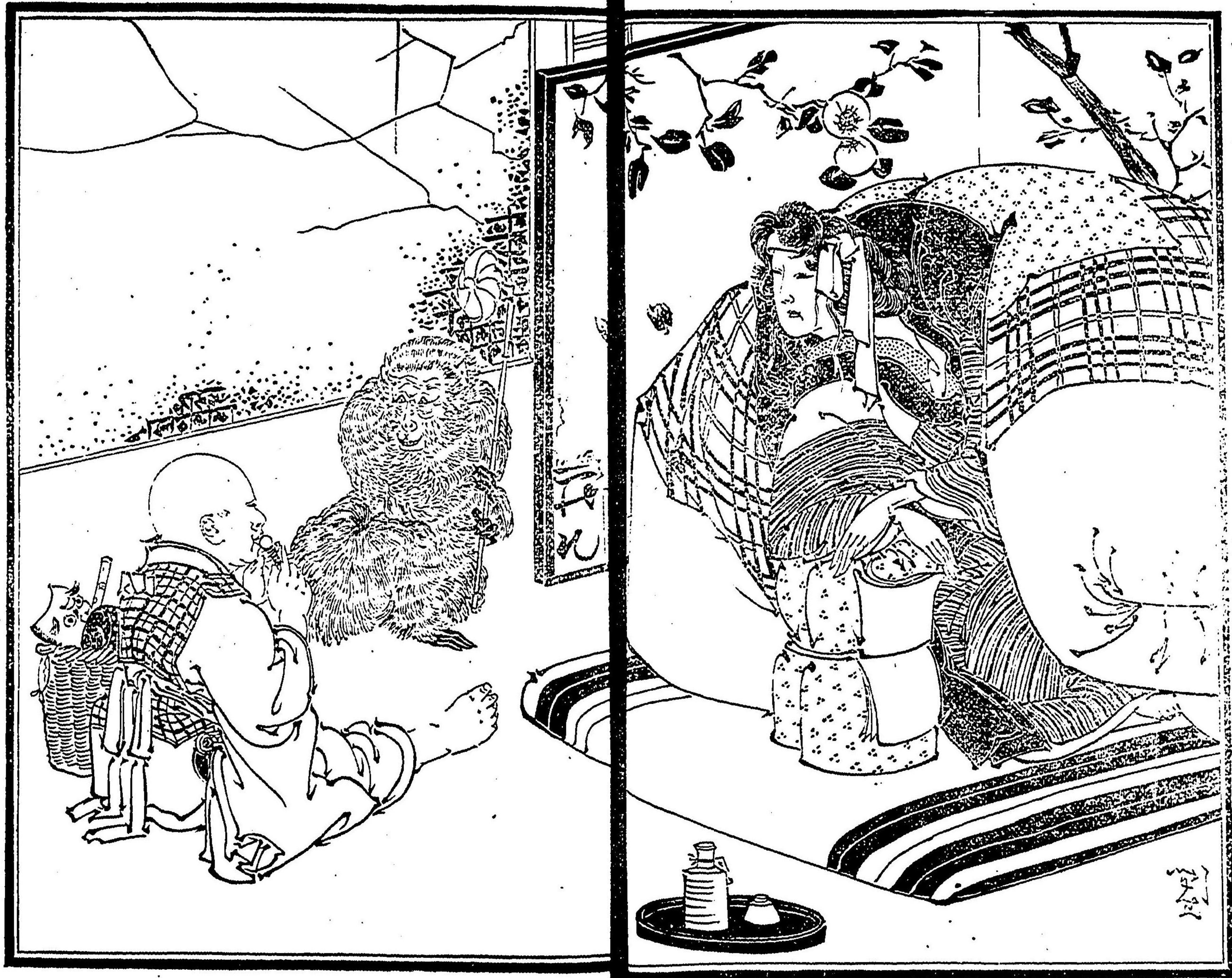
仰しやつた通り猿一匹でも飼つた日にやア夫だけの物入
 もある譯だが夫式の事は我慢して氣永に藝でも仕込で見
 なせへ随分好い値に賣れますせ左も無れば猿曳になつて
 東京中を歩行いても一人や二人の口位あなら樂に過せる
 に違ひねへノウウ噪アどん(女)夫れは最らあ云ひの通りサ却
 て手助けになりますから彌次郎さん心配せず連て行て
 下さいよト夫婦が揃つて歡めますから彌次郎は點頭なが
 ら片手で猿の頭を撫で(彌)汝も憫然な奴だアな未だ小せへ
 形容をして親猿に別れたから嘸かし肩身が狭からうが因
 縁だと諦めろよ俺も汝と同じ様に阿母に別れたのは恰好
 七歳の年だッたが平生は町内の餓鬼大將で悪さばかりを
 做て居たのが其時ばかりは萎れ返り三日もお飯も喰な

ッたのを此年まで忘れは做ねへト我を忘れて泣ますと猿にも通じたものと見ゆ垂れた首を擡るもせずシツと下を向いて居ります

第四回

申續きました猿のお話してございます彌次郎は五平太夫婦に憐れな子猿を貰ひ受まして浅草田原町の宅へ歸つて見ると不在の間に女房お貞が風邪氣だと云て臥つた限り枕が上らず當歳の子供を抱へて困つて居るので同じ長家の神さん達が交るゝ看病して居る處ろて御座います其の混雑の中へ彌次郎が猿を連れて歸つて来たので町内では種々な事を申します(甲)モシ源兵衛さんお聞なすつたかへ彌次郎の一件を(乙)ハイ聞きましたたが實に驚きました子現

在女房が病氣ども知ず四國くんだりへ行て猿を生捕にして來るとは物敷寄な男も有るものさ(丙)イヤ源兵衛さん爾うじゃア御坐いません彌次郎が箱根の奥で獵師の娘と密通いたとお思ひなさいスルト親の因果が子に報つて得手物が生れたから是非なく連れて來たと云ひます物が崇りど云ふは怖いもので御坐います杯と取ても附れない事を言觸しますすが彌次郎は氣にも留ません唯如何かして右の猿を活計の扶けに致したいものだと毎日藝を仕込みますと根が伶俐な猿だから十日か廿日経過や経過に一通りの藝を覺はるお錢が取れる様にはなりませんから隔日に自の病氣が重つて毎日商賣には出られませんから隔日に自宅へ居て藥の世話を致しますと猿も手助をする積と見ゆ



風車を廻したり振鼓を鳴したりして子供の相手を致しま
 すのを側に見て居る彌次郎夫婦は胸が張裂る様でおさ
 ます(貞)アノウ貴郎さん國坊は如何しましたへ大層温順し
 いじやア有りませんか(彌)ム、國坊は例もこの様に猿が守を
 して居るから何にも案じる事はね(貞)オヤ爾うてすかへ
 ト云ひながら横を向いてホロリと涙を溢しますと彌次郎
 も險が一杯になりました(彌)ノウお貞猿といふものは一番
 人間に近いと云ふが斯うも物事が分るものか俺ア猿の了
 簡を考へるとツイ涙が溢れるに付け思出すのは兩親の事
 だ苦勞といふ苦勞を掛て一日半時も樂な日は見せず到底
 先立て仕舞たが切て息のある中に此の猿の半分だけも
 優しい仕打をしたならば何んなに嬉しがったか知れぬへ

が孝行のしたい時分に親は無して今後悔しても還付かぬ
 へ奴よ吁考へれば考へるほど萬物の靈とか云ふ人間に生
 れながら孝行といふ事も知らず親子三人顔を揃へ猿のお
 膚て命を繋ぐと云ふの情ねへ事じやアねへか(貞)ホノウ夫
 を思ふに付け寧ろ妻が死んで仕舞たならお藥劑の代金と
 お醫者様のお禮だけでも大層な達いだから活計も樂にな
 るで有うと平常思つて居りますがまだ死ぬ事の出來ない
 のの餘程業晒して御坐います(彌)エ、馬鹿な事を云て呉れ
 るナ今汝に死なれた日にやア國藏の面倒の……國藏の面
 倒は誰か見る後生だから些とも疾く元の様な體になつて
 夫婦共稼ぎに金を儲け三度三度飯時に吃と膳に向ふ
 様に……ノウお貞毫しても自宅の活計が樂になつたら切

て猿へ思返しに甘へ物でも喰せて遣りてへ俺ア夫が一生の願ひだと男泣に泣く程ですからお貞の猶更悲しみまして括枕に額を押當て聲を飲んで泣て居る所ろへハイ御免よと遣入つて来たの浅草奥山へむさし野と云ふ水茶屋を出し自分の娘に稼がせて居る藤野空平といふ鹿忽しいお爺さんて(空)ヤア居た〜今日こそは是非とも談判を遂ねばなりませんぞハイ〜大分お暖和て大きに春めいて来ました時にお前さんの御病氣はイエなに内儀さんの御病氣の些とづいても好い方かな

第五回

(彌)オヤ空平さん能くお出て御坐いました(空)イエ餘まり能くも来ません何時だツけお前さんが沼津の方へ行くに就

て路用の金が一文も無いから何卒暫時の間十圓だけでも拜借させて下さいと泣かぬばかりにお依頼なさるから平常の懸意づくで嫌忌ども云れず貸す事は貸て上たが……イヤ彌次郎さん此の空平は曲ツた事の嫌ひだヨ……好しかへ貸す事は貸して上げたが何れも鬘斗を附てお前さんに呉れて遣たといふ譯では無い夫を今日までも便々ど知ぬ顔て暮らすどの實にハヤ何とも角ども……イヤ彌次郎さん此の空平は曲ツた事は嫌ひだよ……好しかへ返へす者ハ約束通り間違ひなく返して置いて又と云ヤア知らぬ事だが夫なりけりてハ苛酷いじヤア無いか憚りながら此の空平の曲ツた事の嫌ひだよ(彌)夫りヤア最う仰しやらずとも重々々濟ねへ事どの知て居ますが御覽の通り女房に永

い間煩はれて實に難澁致しますのにてへい、吾儕も曲ッ
 た事と醬油の質と芋虫の性得嫌ひて御坐います如何も
 唯今の所での(空)出来ないと云ひなさるのか(彌)マア早く巾
 せば其様なもので(空)遅く云ても同じことだ同じ事の一ッ
 事と大概相場が極つて居るコソ彌次郎さん能く聞なせへ
 假令お前さんが出来ませんよ冗てすよと云張ても此の証
 文が物を云ふから出る所へ出て取らずにヤア置ませんぞ
 好いかへ否やはあるまい子と懐中から証書を出して頻り
 に見せびらかして居りますと例の猿が横から出て何時の
 間にか証書を取り火鉢の中へ投込んだのでホツと燃て仕
 舞ひました(空)オヤ此ノ畜生奴苛酷い事をしヤアがる是で
 十圓玉なしたと青くなつて仕舞ひますと彌次郎も氣の毒

だから(彌)是の如何も空平さん小僧が飛んだ事を致しまし
 て申譯が御坐いませんが好しや証文が烟になつても借な
 いなぞと申す様な彌次郎での御坐いません出来さへすれ
 ば相違なく屹と御返濟致しますから何卒最う少く御勘辨
 を(空)宜しい待てなら待ちませうが証文代りに此の猿を預
 つて行きますからマア爾う思つてお呉なさい(彌)イエ、
 夫の困ります猿のお蔭で親子夫婦が生命を繋ぐ仕義です
 から肝腎の商賣物を貴方に持て行れての拜借金御返濟
 れ扱置き親子三人頭を揃へて明日から飢渴に迫りますゆ
 え何卒おれの御用捨を(空)コソサ彌次郎さんお前よりも俺
 の方が困ります催促すれば御勘辨を云ふ猿を預らう
 とすれば御用捨を云ひなさるが御勘辨と御用捨の烏渡

祇園が遊ふばかり親類交際の言葉だから兩方一緒に聞
 るものかど無理無恥に猿を引摺いて表へツイと駈出し
 した彌次郎の猿を取れて内心實に迷惑します金が借り
 た弱身があるのて追懸て行く譯にも何か腕を組んで考
 へて居ますと辨天山に撞出す子の刻の鐘の音がホー
 鳴響いて世間が寂寥と静まりました此時誰とも知れませ
 んが表の戸をトノくと叩き聞馴れない女の聲でアノ鳥
 渡御免下さい狗に取巻れて困りますから何卒お内へ毫し
 の間だ……アノまた其所へ來ましたから早く開て下さい
 ましと震聲で助けを請ふの未だ年のゆかぬと見ゆる娘
 の聲音で御坐いますから彌次郎の忙しく戸口をガラリ
 と開る途端に轉げる様に這入つて來たのの頃十六位

第六回

めの美しい娘で御坐います島田番のガツクリと横に倒れ
 束綿の緋鹿の子が雪の様な襟許にバラりと下つた有様
 新駒の八百屋お七が駈出して來た様な盃梅ですが餘程物
 に恐怖たど見に挨拶もせず飛込む機會に袂からバラ
 と落たのの皆二圓紙幣でございます
 繪に書いた様な頗る美人がパツと駈込んだので彌次
 郎の呆氣に取られ袂から落た二圓紙幣と娘の顔を見比べ
 ながら茫然として居ましたが稍有つて前に進み(彌)モシ
 嬢さまお袂から何だか大層落ました(娘)オヤ左様で御坐
 いますか有難う存じますと娘の周章で落た紙幣を袂の中へ
 仕舞ひ込むのを彌次郎のチロリと見て(彌)イヤお嬢さま失

座でございますが唯今貴儀がお仕舞ひなすつたのにお金じやア御
 坐いませんかお服装と云ひ御様子と云ひ御福な家
 お嬢さまどの伺はずとも知れて居るゆゑお金を何とも思
 召さずお袂へ入れてお出なさるのを吾儕共の目から見ま
 すと勿躰ない様に思はれます殊にお見上げ申す處ろ此の
 眞夜半にお供も連れず單身でお歩行なさるのみかお頭髪
 の亂れた接排からお穿物もない御容子の如何やら譯が御
 坐いませうア其所で冷ますから何卒此方へと申
 した所が足の踏場も無い様な御覽の通りの貧乏世帯病人
 もお客様も同席へお通し申して甚だ如何も濟みませんが
 (娘)イエ〜構つて下さいますな妾おそ唐突に飛んだ御無
 理を願ひまして申譯が御坐いませんがお優しい其のお言

葉を背戻きますのも何とやら其様なら暫らくお座敷で休
 ませ下さいまし(彌)サア〜御遠慮に及びませんと椽
 の下から盥を出して洗足の水を汲み(彌)生憎鐵瓶の湯を差
 したばかりで未だ沸立て居ませんから冷たう御坐いま
 せうがお冷水で御勘辨なさいましと行届いた彌次郎の手
 當に娘の頬りに禮を述べながら足を拭いて上にあがり左
 も極りが悪るさうに行燈の灯に顔を背け小さくなつて座
 つて居ります彌次郎の籠の懸つた欠土瓶の蓋茶を汲んで
 娘の前に差出ながら(彌)能く小本や淨瑠璃に一樹の蔭一河
 の流れ袖振合ふも他生の縁と申す事が御坐いますか今宵
 不思議にお嬢さまが狗の爲に取巻れて斯んな家へ駈込ん
 だのも何ぞの御縁で御座いませう様子に依たら吾儕がお

送り申して上げますからお話しの出来る事なら膝ども談
 合せよとやら何と吾儕に其譯を仰しやつての下さいませ
 んか(娘)ハイ種々ど御心切に有難う存じますアノウ妾の宅
 と申すの上野の方で御座いますか些と譯が有りませから
 名前前の理然に申されませぬが或る呉服屋の一人娘で妾の
 名前の花と申します(彌)ナ、成程御標致に相應した好いお名
 前で御座いますアノウ妾の花と申します(彌)ハイ夫の
 何で御座いますアノウ妾の花と申します(彌)ハイ夫の
 程お花さんと仰しやいますお奇麗な好いお名前(花)夫か
 ら妾が家出したののアノウ何で御座いますか矢張り原因
 を糺して見ると乳母アが悪うおさいませダカラ平生阿
 父さんがお前の様な心懸の悪い人の無い堅氣な商人の奉

公を廢て箱奴にでもなるが好いと口癖の様に仰しやいま
 した阿母さんが可哀さうだと云て何時までも置いて遣
 りました處ろ昨年の暮亡くなりました其時に阿父さん
 も年久しく馴染んで見ると死別れの嫌忌なものだと涙を
 流して入ッしやいました(彌)イエそんな事何でも宜し
 い又何ひましても冗てすから貴嬢が家出をなさつた譯を
 鳥渡摘んで仰しやいますし何れも其なに耻しがって仰しや
 る事御座いませぬから話を横道へろらさずにはマア
 云て御覽なさい随分吾儕も様子に依ての御相談にも乗り
 ませうサ

第七回

お花の何か云そびれて顔を眞赤にした美しさを小説口調

て申したら時ならずして紅葉を散すが如き風情なりと奇麗な形容を並べるのは這許等の事で御座いますせう暫らくの間は何にも云す際にの字を書いて居ましたか漸くの事で前に進み(花)折角のお尋ねですから耻も外聞も打捨て家出の仔細を申しますがお笑ひなまつての嫌忌です(彌)何の貴様手前の方から急立て伺ひながら笑ふなんのと云ふ様な爾んな失禮な事が有りますものか(花)ろんならお話し申しますがアノウ妾の家へ十二の年から年季奉公に住込んだ佐吉と申す者が有りましたが是は妾よりも二ツ年上で御座います奉公人のことですから身装ころ能く無いが夫の可愛……マア何よりも第一に志操の温順な性質で朋輩達との交際にも影日向なく勤めますので阿父

さんも佐吉に眼を懸け行くくの暖簾を分て立派な者にして遣と親が褒れば妾までもツイ佐吉に最負が附て……貴方笑つて下さいますな實の乳母アの媒妁で劇場の歸途に去る待合へ三人連れて参りま志たが世の中の事と云ふものゝ兎角いけなもので御座います恰好今年のお正月七草の頃でした佐吉に窃と遣らうと思つて書いた手紙を袂に入れ庭へ出てお隣りの嬢と追羽根をして居りますと其嬢が佐吉の事を云て種々と黽りますから嬉しいやら憎らししいやら思入れいじめて遣らうと羽子板を持って追廻す中何時しか手紙を落したのを妾の毫しも気が付ず其儘で居た處ろ翌日の正午時分如何いふ譯か花川戸に居る佐吉の阿父さんの佐平が来て何か阿父さんと久しい間だ内密

話を做て居ました。が、應て佐吉を車に乗せ一緒に歸つて仕舞つたゆゑ如何いふ仔細で唐突に暇を取て歸つたのか一言ぐらゐの其譯を妾に知らせても好らうのに黙止て行く言ぐらゐの口借涙に暮れました。人が聞くといふ事もある。出ず仕方が無いから知らぬ顔で陰ながら泣て居ます。最も月日も経過たから何の仔細もあるまいと油断をした。店の者が噂するのを立聞くと落した手紙を番頭が捨ひた。阿父さんに見せたので急に佐平を招寄せ様子を話し。て佐吉を渡し直に暇を出したのだと聞た時の悔しさ。ア何なて有りまして。うシア見れば那の佐吉が何も不實ど云ふて無いから一目なりとも逢た上行末の事を相談し。やうと思立ての矢も指も堪らない様な氣持です。から辨

ない事どの知りながらお金を少々持出して今夜自宅を忍び出で是から花川戸の佐吉方まで参るので御座ます(彌)いづれ爾ういふ事て有うと吾儕も察しました。がお若い中に往々ある事ゆゑ見ず知すの吾儕が何も御意見がましい事などを申すには及びませんが唯一言氣を附けて上ねばならぬ譯といふの附詰た事を遊ばすなど申すばかりで御座います。而して貴嬢の花川戸の佐吉さんとか云ふ人の宅を御存じて御座いますか。(花)ハイ………イ、エ佐吉の宅へに参つた事が御座います。せん(彌)うんなら番地でも御存じてすか。(花)イ、エ夫も(彌)サア、其所が懐育のお嬢さんの景下。了簡花川戸と申しても廣い事で御座います。すから夜更小更にお出なすツても中々知れやア致しません。(花)オヤ爾うて

御座いますか直に知れる事だらうと何の氣もなく出て來
ましたがマア如何したら好らうやら貴方飛んだ事を致し
ました

第八回

(彌)如何すると云つて此の夜半に仕様模様も御座いませ
んから貴嬢さへも厭ひなくば物置小家を見た様な穢ない家
では御座いますすが二階が明て居ますからマア今夜は遣許
へ泊つて明日花川戸へお出なさるのも但しはお宅へ引返
すとも篤くり御分別をなすつた方が宜しいては御座いま
せんか(花)ハイ難有う存じます泊てさへ下されば何の狭い
の穢ないのと其様な事は厭ひませんから御迷惑では御座
いませうが今宵一ト晩お二階を拜借させて下さい(彌)サ

アお泊りと極つたなら今夜も餘程更ましたから最うお休
みと遊ばしませんか御案内を致しませうと蠟燭の折れに
火を點して二階へ上らうと致しました何が何を思つたか再
び坐に若き(彌)イヤお嬢さま先刻も鳥渡お見懸申しました
が貴嬢は確か多分の金子を袂に入れてお出の様子若し泥
棒でも這入つた時に飛んだ事になりませうから失禮なが
ら吾儕が確かりとお預り申し人の氣の付ぬ様に葛籠の底
へても入れて置けば大丈夫でおさいますから御掛念なく
吾儕にお預けなすつて如何です(花)ホンニ爾で御座いま
す其様ならお預け申しませうとお花の袂へ手を入れたが
奈何に深窓の裡に人と爲つて世間を知らぬ娘でも今の命
の綱と頼む大切な貯蓄を迂潤に人に渡されまいと流石

に心が着きました併し種々と思を受け今宵も這許に泊
 る身が飽きて主個を疑つて此金を預けぬ時に折角の心
 切を盡餅にすると同じこと若し又主個に悪意あつて表
 だけ心に切に見せ金を騙取する心ならば金を渡して遣らぬ
 上の暫らくも這許へ置ず忽ち追出して仕舞ふて有ら何れ
 にしても身の難義もえ所持金の半額だけの素より無い物
 ど思諦らめ捨た氣で預けやうと早くも思案が定まつたの
 で右の袂を掻探り五十圓餘の金を出して彌次郎の前に並
 べ(花)ろんなら貴方失禮ですが此のお金を明朝まで何卒預
 かつて下さいましたし(彌)へい宜しう御座います確かりと
 預かりましたと右の金を懐中に納め二階へお花を連れて行
 て煎餅の様な庸圖を敷いたが生憎枕が有りませんから下

へ行って取て来やうと彌次郎のまた梯子段をミシと下
 りて来た頃最う夜の二時で御座いました何か屈詫らし
 い顔をして溜息を吐きながら竊と女房の寐床を覗くと病
 氣づかれにスヤと寐て居る様な容子だから打黙頭い
 て二階を振向き(彌)ア、有る所にやア有るものだ俺に預け
 たの五十圓だが未だ左りの袂にも百圓位ある様子が
 ア、那の金が欲しいいなアと獨言を云ひながら枕を片手に
 上つて行くとお真の細く眼を開いて彌次郎の影を見送り
 (貞)病氣の爲に惱まされて物を云ふのも太儀だから所夫と
 娘の話の中に口出しもせず寐て居たが如何やら怪しい
 所夫の素振り殊に寄ると金に目が昏れ悪事を働らく氣で
 の無いか心にかゝる今宵の仕義變な事でも無れば好いが



第九回

と頻りに案じて居りますと天井の上で何事だか尋常ならぬ物音がして立騒ぐ様な鹽梅にお貞の益々氣を揉んで起直る枕許に何だかマラ〜と落ちて来ました急須でも倒したのて茶が二階から溢れたのかと行燈の灯を掻立ながら睡子を定めて能く見ると紅葉でも散らした様に其許等一面眞赤だから扱の娘を殺したかとお貞の吃驚して仰向きまにパツマリと倒るゝ折しも裏口の方に當て火事だ〜と叫ぶ聲の耳を貫ぬく様で御座います

火事だ〜と叫ぶ聲の響も未だ終らぬ裡に勝手の方から吹込む煙は渦を巻いて室内に滿ち火の子が雨の様に降來るのでお貞は夢に夢見る心地で頻りに所天を呼びますと

彌次郎も二階から轉げる様に飛んで下り(彌)お貞何を悪くして居る早く逃にやア焼死ぬぞと宛然手を取て肩に擔ぎ表の雨戸を蹴放して一二町ほど逃げ伸びたので先づ命だけは取留めたとホツと一息吐きましたがお貞の病苦に惱む上に最前からの胸騒ぎを擔がれて來た息切れに口を利く事も出来ず唯我家の方を指さして何か頻りに泣きますから彌次郎の脊中を摩擦り(彌)オ、自宅の最上焼けてお隣に燃附た様だが貧乏世帯の一徳に惟しい様な荷物も無く自宅と云ても借家だから焼けた處ろが平氣なもんだ時に國坊の泣もせず大層温順しい様じやア無いかとお貞の懐中を覗きましたたが國藏の姿の見えません是に彌次郎も驚いて周章た盛を振絞(彌)エ、國坊の如何したのだ迄

中にても墮落しやア做ねへかオイも貞國坊の如何した泣
 て居ちやア分らねへ(貞)アイ國坊の自宅へ置て来たよ焼死
 んでの大變だから早く行て連れて来てお呉れ(彌)何んだ自
 宅へ置いて来てたど此の間扱めがと云ひながら我を忘れて
 拳を上か大病人の女房をボカくど撲りましたからお貞
 の大地に確と倒れ壁をわめて泣伏しなから(貞)其の腹立の
 道理だか不意の事と大病に骸の利す狼狽の喰唯迂論
 として居る所へお前が二階から下て来て突然妾を引摺ぎ
 表に駈出して仕舞つたので坊を助ける隙も無く……ア、
 其様な事を云て居る間も我子の生命が氣遣ひだから何卒
 早く行つてお呉れ(彌)オ、違へねへ其通ひだお貞を其所
 に捨て置いて一目散に取返し我家の傍まで証附ました

が最う十分に火が廻つて近寄る事も出来ません吁國藏の
 此の火に包まれ生ながら火葬になつたに違無いと思はれ
 るが其時の苦しみ何の様に有つたかど其所の親子の恩
 愛で腹腸が寸断くちぎるゝ様な心地なれど如何も仕
 方が御座いませんから悄悄として歸つて来ますとお貞の
 待兼て居たと見え(貞)モシお前さん如何したへ坊を連れて来
 ましたか(彌)冗だく最う往ねへ折角取返して見ると自
 宅の何時しか焼けて仕舞つて這入る事も出来ねへから仕
 なく蹄つて来たが最う今頃の死んで仕舞ひ灰になつた時
 分て有う幾許歎いても返らぬ譯ゆゑ是までの壽命と歸ら
 めお念佛でも唱へて遣るより外に如何も仕方がねへど
 男泣に泣ますのでお貞の彌々歎き悲しみ(貞)病氣で我子を

取れてさへ悲しむのが世の人情況して親々の手落から焼
 殺したと思ふ程不便さが百層倍て妾も一緒に死にたいと
 同じ事を幾遍も繰返して泣きますのを彌次郎の睡し宥め何
 時まで這許にも居られまいから立退ずばなるまいと種々
 行先を考へても別に知縁が御座いません尤も新堀端の青
 龍寺と云ふの彌次郎と俗縁の者が當時住職となつて居て
 了念和尚と申しますが大の慾張坊主で貧乏人なら親
 類でも寄附ぬといふ男ゆゑ平生の疎遠に致しますが斯う
 いふ折の特別だから二三日の間頼んで見やうとお真を連
 れて同寺へ出懸け譯を詳しく話した上金十圓に鬘斗を附
 て了念に遣つたので是までどの打て變り大喜びで泊て呉
 れましたお真の此様子を見るに附け所天が十圓と纏つた

第十回

金を惜し氣も無く進物としたの彌々お花を殺害して所持
 金を盗んだのに相違の無いと深く信じ疑ふ氣色は有りま
 せんが單身腹の裏に納め未だ口へは出しませんでした

前申上げました通りお真の飽まで所天を疑ひ女の愚痴な
 心から種々な事を思廻すと所謂神経病とやらで碌なこと
 の考へません我子國藏が焼死んだのもお花を殺して金を
 盗んだ其怨念の崇りにて即坐に國藏を執殺し漸次に妾等
 夫婦をも惱ます心に違ひないで一筋に思詰ると庭の蘇鐵
 も妖怪に見ゆ枕許の野鐵にも眼鼻が附いたかと思はれま
 す殊に最愛の子を失つた非常の哀傷に肚裏が亂れ其翌朝
 から發狂の氣味で取留らぬ事を口走りすから彌次郎も

手が放されません餘儀なく寐床の間に居て頻りに介抱を
 致して居ますとお真の何を思つたか彌次郎の顔を打目成
 り(真)モシお前さん改めて聞きたい事が有りませんが永の年月
 進添て互ひに氣心を知りて居る女房の此妾に何もお隠して
 有るまいねへ(彌)何だ改めて聞てへ事どの如何いふ仔細
 知ねへが何を汝に隠すものか如何な事でも有りませんが昨
 ア其の譯を云て見なせへ(真)外のことでも有りませんが昨
 宵自宅へ泊てあなただお花どか云ふお嬢さんをお前如何か
 お做じやア無いか(彌)篋棒めエ那の娘には佐吉といふ色男
 が有つて自宅を駈出した様な譯だから俺なんぞが口説い
 たつて及ばぬ戀の流上り手も足も出しやアしねへ(真)ア
 サ色の戀のど云ふ浮氣な事を聞はしなないヨ妾が疑ふ其譯

は若しや貧の出来心でお嬢さんを殺した上お金を取りは
 做ないかど念の爲めに聞て置くのサ(彌)ナ、何を云ふ譯か
 にしろ人に聞れると大變だコレお貞汝もまア飛んだ事を
 云ふじやアねへか假令貧苦に迫ればどて盗などを働らく
 やうな彌次郎か彌次郎でねへか大概分つて居さうなもの
 だ(真)アイ妾も今日が日までマンザラ旋髪の曲つた人ども
 氣が附ずに居ましたか如何やら譯のありさうな昨晚の様
 子と云ひ了念さんに包んで上げた十圓のお金と云ひ怪し
 い事で堅めて居るから最う分疎は出来ないう寶は殺して
 お金を奪ひ死骸を隠す其爲に火を放たのも彌次郎だとサ
 ア真直に云てお仕舞ひ(彌)コレサ、途方もねへ申殿にも
 りんな事はペラ、饒舌る奴があるものか壁にも耳の俚

言の通り冤罪の難義でも受た日にヤア最う取返しが付ね
 へぞ(貞)サア、其所だから聞きますのサ壁にも耳でお官に
 聞え繩でもか、つた其日には却つて罪が重くなるから世
 間へハッどせぬ裡に早く此方から自首して呉れ(彌)エ、
 此奴めが如何やら斯うやら俺を罪に落したか(貞)好いヨお
 のねへ事ゆゑ何が面白くつて自首するものか(貞)好いヨお
 前が嫌忌ならば妾が警察へ駈込でこれ、だど訴へませ
 う其上前が御法通りお刑罪を受たならお花さんの怨も
 消て國坊の罪も滅び行く所へ行るて有うと突然蒲團を刎
 のけて庭へハタ、と駈出たので彌次郎は臆を潰し(彌)コ
 ヲコ、お貞何處へ行く疑ひが晴れる様に云て聞せる事が
 有るからマア暫らく待て呉れと呼べど叫べど聞入れませ

第十一回

ん斯なるど女の一念は實に凄いもので御座いまして病苦
 を厭ふ氣色も無く累々たる石塔を彼方に投げ此方に抜け
 古卒塔婆で結寄せた榎木の垣根を滅離々ど壊して表の方
 に駈出したお彌次郎も續いて出ましたお最早や姿も見
 えなから改めて捜索に出やうと一旦寺へ取つて返し身
 支度を整へて了念にも譯を話し急いで外へ立出る所へ走
 向つた探偵方が左右から利腕を執へ御用を聲と諸共に腰
 繩を打て徐々ど警察署へ拘引しました
 お話し變つて花川戸に住む佐吉の親佐平の許へ上野お成
 道の呉服商井筒屋金之助方から何用かは分りませんが至
 急に來る様にどの手紙が参りました是は以前悴の佐吉が



永い間奉公して居た主筋で御座いますから職業の鼻緒も
 何も片隅へ丸めて置いて晴着と云ふも名ばかりの唐棧の
 羽織を引懸け急いで井筒屋へ参りますと待兼ね居るもの
 と見ゆ直ぐに切戸からお庭へ廻りなさいと小僧長松の
 指揮に任せ飛石傳ひに座敷へ通ると主個金之助も女房お
 露も椽側まで出迎ひ(金)オ、佐平さんお忙しい處を直ぐに
 お出下すッて誠に難有う御座いますサア、遠慮は無用
 にしてスツと此方へ通つて下さい(露)サアお前さんお上ん
 なさいよ誰も外には居ないから(佐)へイ、御免下さいま
 しと沓脱石に草履を脱捨て小腰を屈て座に通(佐)何だか
 急なお招きですから取敢ず罷出ましたが如何やらお見受
 申しますと貴方がた御夫婦のお顔色も常ならず何か心に

懸りますすが急な御用と仰しやいますは如何なる筋で御座
 います(露)サア佐平さん外でも無いが昨宵若しや娘のお花
 がお前の自宅へ行きはせぬか夫が聞たら御坐いますのサ
 (佐)エ何と仰しやいますお嬢さんが手前共(……)イ、エお
 出では御座いませんがマア夫は如何いふ譯で(露)ろんなら
 矢張り此世にはどお露は思はず聲を上げて一聲ワツと泣
 伏しました(金)イヤ佐平さん女房が自分の聞たい事だけ聞
 て譯をも云はずメソ、と泣てばかり居りますから御合點
 が行きますまいが是は斯ういふ仔細です昨夜花が手許の
 金子を百五十圓ほど持出して透電したとお思ひなさい夫
 も漸う今朝になつて気が附た様な仕末だから追手を
 出すの足留の上を下への太騒動お露は餘り氣遣つて御

永い間奉公して居た主筋で御座いますから職業の鼻緒も
 何も片隅へ丸めて置いて晴着と云ふも名ばかりの唐棧の
 羽織を引懸け急いで井筒屋へ参りますと待兼て居るもの
 と見ゆ直ぐに切戸から庭へ廻りなさいと小僧長松の
 指揮に任せ飛石傳ひに座敷へ通ると主個金之助も女房も
 露も椽側まで出迎ひ(金)オ、佐平さんお忙しい處を直ぐに
 お出下すつて誠に難有う御座いますサア、遠慮は無用に
 にしてズツと此方へ通つて下さい(露)サアお前さんお上ん
 なさいよ誰も外には居ないから(佐)へイ、御免下さいま
 しと沓脱石に草履を脱捨て小腰を屈て座に通(佐)何だか
 急なお招きですから取敢ず罷出ましたが如何やらお見受
 申しますと貴方がた御夫婦のお顔色も常ならず何か心に

懸りますすが急な御用と仰しやいますは如何なる筋で御座
 います(露)サア佐平さん外でも無いが昨宵若しや娘のお花
 がお前の自宅へ行きはせぬか夫が聞たう御坐いますのサ
 (佐)エ何と仰しやいますお嬢さんが手前共へ……イ、エお
 出では御座いませんがマア夫は如何いふ譯で(露)ろんなら
 矢張り此世にはどお露は思はず聲を上げて一聲ワツと泣
 伏しました(金)イヤ佐平さん女房が自分の聞たい事だけ聞
 て譯をも云々メソ、と泣てばかり居りますから御合點
 が行きますまいが是は斯ういふ仔細です昨夜花が手許の
 金子を百五十圓ほど持出して透電したとお思ひなさい夫
 も漸う今朝になつて気が附た様な仕末だから追手を
 出すの足留の上を下への大騒動お露は餘り氣遣つて御

膳も喰へぬ様な譯なれど花が逃げて行つた其先は前方
 に違ひないと俺は大槻察して居るから夫程には氣を揉ま
 ず何れお前が宥め購して連れて來るに違ひないと高を括
 つて追手も出さず心待に待て居ると先刻警察署の探偵が
 來て當家の娘は花と申すか其者は昨夜の中家に出したて
 有うなと星を差した一言に仰せの通りと返答すると實は
 其者が田原町の彌次郎といふ猿曳方へ一泊を頼んだ處ろ
 百五十圓の金に目がくれ遂に花を殺害して盡く所持金を
 奪ひ利さへ其死骸より發覺せん事を恐れ自から我家に放
 火せし由女房お貞の密訴に依り直様彌次郎を捕縛せしが
 お貞は豫て大病に罹り餘程衰弱せし上に種々憂慮の積り
 しゆゑか右の趣きを陳るが否や忽ち其場にて絶命せしか

肝腎の證人を失ひ詮議の手藝を取逃したれど現在女房
 の訴へなれば充分の證據と見るも敢て運たりと云ふに非
 ず數々白州に牽出して彌次郎を尋問すれど彼奴なかく
 口を開かず如何にも其夜上野邊の呉服屋の娘お花といふ
 を一宿させしに相違なければ火事の騒ぎに如何なりしか
 我子をさへ殺す程ゆゑ他人の事は存じませぬと飽くまで
 も言張るゆゑ未だ是非を分たねど兎も角娘の身の上を詮
 索せんと取調ぶるに上野邊の呉服屋にて花と申す娘を持
 つは當家より外には無し依て昨夜透電せしか但しは今以
 て宅に居るか其議を調べに参つたが符節を合する返答に
 て當家の娘と分りたれば何れ召喚する事も有らうと言置
 いて歸られたので漸やく娘の安否が知れたが此の様子で

は十の物が九ツまでは彌次郎とかに殺されたものと思は
れますと眼を屈瞬く有様に佐平は只管呆れ果て暫しは何
の言葉も無く唯茫然たるばかりでした

第十二回

(佐)夫はまア飛んだ事で無ぞかし御愁傷で御坐いませうが
是と申する原を糺せば悉皆倅佐吉めの不埒から起つた
と何とお詫を致しませうやら申譯が御坐いません(金)イヤ
く今度の一件の佐吉の知つた事てハ無く跡先見ずの無
分別に親の金を持出した娘花の心得違ひ不孝の罪が身を
責めて其夜の裡に人手に罹り非業な最期を遂げたのは自
業自得と云ふものゆゑ決して人様は怨みません併し親子
の情は格別なもので片輪な子母と不便が増すと世の警諭

にも云ふ通り夫程までにも佐吉の事を思詰て死んだかと
彼の心を推測れば不埒の廉も打忘れ唯可哀さうになりま
すから切めて似果を得るやうに位牌と佐吉と婚禮させ一
旦斯うと思込んだ願ひを叶へて遣りたい也何卒お前も
吞込んで佐吉が承知するやうに言聞せては下さるまいか
(金)今も良人の云ふ通り爾ういふ事にして遣つたら那の確
も成佛するで有らうと未練な様だが相談してお前を呼び
に上げた譯ゆゑ如何か宜しく頼みます(佐)イヤ難有ひ其の
お言葉何の否やが御坐いませう吾儕は最う先刻からお兩
人様の御心中を嘸かしたと推量して思はず涙が溢れました
と異儀なく承知の返答に(金)之助は涙ながら手文庫を引寄
せまして金五十圓取出し(金)扱佐平さん斯う申してハ甚だ

無禮では御座いますがお前のお宅も此頃ではお手許が御
 不如意勝だ承まいつて居りますから些少なから此の金
 子て婚禮用の衣服調度を遠慮なく購求て下さい悪むと云
 ての失禮ゆゑ御受納もあるまいが是の當坐の結納代り
 心にさへられず如何か納めてお呉んなさい(佐)へい
 これの何から何まで難有いお心附御承知通りの身分です
 から御遠慮なく頂きますと金を納めて暇を告ぐ後日を約
 して立出ました途の序に淺草寺の觀世音へ參詣し御神
 馬にも豆を喰せてむさし野といふ憩茶屋で暫らく足を休
 めました申さずともこの事ながら此の茶店の空平の住居で
 すから抵當に取れた例の猿が店頭で遊んで居ります但見
 ると人參や蓮根を細かく刻んだ猿の餌が押並べて有りま

すから佐平の蔵れに餌を遣らうと財布から一錢銅貨を取
 出して二ツ三ツ買求め頻りに玩弄つて居りますと遣許へ
 ノソくと遣つて来たの双子編の素袷に丈の請つた半
 纏を引掛け算盤玉の三尺を占めた人品の悪い男で紳號を
 木鼠の勘次と云ふ巾着切で御坐います何か思ふ旨がある
 と見ゆ床机の側に竝立んで猿を見て居る風情に持爲し佐
 平の財布をショと横眼で睨んで居ましたのが充分隙が
 有つたと見ゆ引摺はうと手を出す途端に早くも猿の方が
 財布を掴んで側へに茂る銀杏の樹にスルくと蹴上りま
 した勘次は思々しく堪らぬと猿に罪を塗り付けて自分
 が遁れやうと思ひますから故意と周章た聲を出し(勘)モシ
 お前さん大變だ得手が財布を掴んで逃やしたせ(佐)成程財

第十四回

座呼をの布
いんで取かどが
ませ見られ財無
せんてもは布な
も素は大心つ
より変だ附が
言葉オイ居た
が分らない返
して呉れオ、イ
も仕方が御と
の居るの
座いません

角々む藍にサラ
の鳥の櫛拍子に
子の刻過ぎ唯今
て御座います折々
て襦袢やらぬ移香
者おの早歸りと思はる

と筑波下りの風寒く夢冷かなる浮雲
と噪ぐ羽音も物凄き昔して云ふ
て申さば零時何分とか云ふ
の聞えるは大引前に名残を惜ん
音の聞えるは零時何分とか云ふ
の聞えるは大引前に名残を惜ん

花川戸の川添ひに二問々口の小さ
花川戸の川添ひに二問々口の小さ

い家は佐平の住居でございます
最期の由を聞き飽も飽れもせぬ
着の情に堪へません
見れば流石に人の手前では女らしく泣く事
り云ふ爾んな呑気な譯で無いから何時までも目は合はず沈
紙のピッショリと絞る様になつたを見ても其の愁傷が思
はれます兎角して夜は更けましたか如何しても眠られな
いかから佐吉の寐床を起出でて佛壇に御灯火をあげ頼りに
花の後世を吊ひ南無阿彌陀佛と回向して居りますと
雨戸の側に誰かは知ぬと糸より細い女の聲で(女)佐吉さん
と二遍三遍名を呼びますから佐吉の不思議さうに眉

を 鑿め段々考へて見ましたが夜中に女が忍ぶやうな心當
 りが御座いませんハテ訝しいと思ひながら雨戸を細目に
 押開き(佐)へイ、佐吉の居ります貴嬢の何方から出
 てすと情々其女の姿を見ると島田嶺の横に倒れて髪のは
 つれ毛がバラリと下り雪より白い奇麗な顔へ入峽の月の
 片明りが臙に照して居りますので顔色が眞青に見ゆ標緻
 が好いだけ一段に凄味のあるものですから佐吉の思はず
 ツツとしながら瞳子を定めて能く見ると人手にかゝつて
 非業に死んだ彼のお花に違ないから扱ひ迷ふて來のかど
 吃驚して雨戸を締切り震聲で一生命の念佛を唱へて居
 ますとお花の涙の聲をあげ(花)モシ佐吉さん後生だから何
 卒這許を開けて下さい一目お前に逢つた上云ひたい事さ

へ云て仕舞へば死んでも佛しますから鳥渡こゝを開け
 て下さい(佐)エ、お嬢さん何が不足で貴嬢のお迷ひなさい
 ました吾儕も義理に擲まれ是非なく貴嬢を思切てお暇を
 取りましたか心がまては變りませぬ何時ぞや互ひに取替へ
 た起證誓紙は大切に今以て肌身を離さず時節があつたら
 一日でも亭主と云れ女房と呼び本意を遂げた其上では直
 ぐに死んでも厭はねど思詰て居た處ろ思懸ない貴嬢の御
 最期迷ふてお出遊ばしたる更々無理では御座りませんが
 唯今も申す通り手前に於て變りは無いゆゑ貴嬢が死んだ
 ら最ふ好いは他の女を嫁に貰ひ娛樂さうに暮すやうな
 吾儕では御座いません必ず頭を剃こぼち身に墨染の衣を
 着て貴嬢の誓疑を吊らう爲め樹下石上を宿となし諸國行



ア往ねへせ五十圓といふ大金を引渡つて逃たから畜生で
 も四ツ足でも用捨なく射落して取戻すのに不思議はある
 めへ(空)オヤ此の野郎大層威張るナ射殺して宜ものなら手
 前から先に射殺さしやアならぬ(勘)ナ、何んだと(空)人は
 何にも知らぬと思つて罪を猿に塗り付け礼金までもせし
 め様とはイケッ太い畜生だコレやい俺は最前から障子の
 内で見居たが最初手前が此のお客の財布を拘摸うと狙
 つたのを猿が横から引懸つて樹の上に見つたのだシテ見
 りやア手前おそ罪を犯した當人だからサア交番へ一緒に
 来いと手首を取つて引立てますと勘次は吃驚りして振放志
 最う往かないと思つたのか一目散に逃出しました空平の通
 懸もせず莞爾と笑つて佐平に向ひ(空)モシお空人先刻から

お聞の通りの譯ですから那の猿の無調法は勘忍して遣つ
 て下さいますし(佐)へイ如何も驚きました那の男が泥棒とは
 ……實に如何も驚いた奴で心切おかしに罪を隠し礼金を
 取らどは太い野郎で御座いますへイ、何の那の猿を憎
 い奴と思ひませう却つてお禮を申しますすが何しろ財布に
 は五十圓那れが失くなつては大變です(空)イヤ、夫は大
 丈夫直ぐに取戻して上ますから御心配には及びませんと
 空平は梢を眺め手をポン、と打鳴すと猿は財布を持つ
 たまゝ又スル、と下りましたから財布を取って佐平に返
 すと佐平は心底から感に堪へ(佐)イヤ如何も感心な小僧だ
 お蔭で災難を通れたから何時までも此の猿を大事に育て
 遣りたいが何と譲つては下さいますせんか幾許なら貴君

の方でお手放しになりませう(空)夫ほどの御所望なら随分
 譲つても上まじうが是は少々譯あつて十圓の抵當に取つ
 た猿廻しの猿ですから謂は預かり物で御坐います但其の
 猿廻しの噂を聞けば何か長くない事をして拘引れたと云
 ひますから先づ十圓の貸金の戻る事も有りますまい左
 れば他へ賣渡しても故障の來る氣遣ひもないゆゑ到底損
 だど諦らめて七八圓も下されば夫て宜しう御座ますと早
 くも相談が整つたので佐平の八圓で猿を買取り其儘脊
 負つて歸りました

第十五回

佐吉の一途に娘のお花が死んだ事と信じて居るので減多
 にの戸を開けず頻りに念佛を唱へて居るとお花も漸く

覺つたど見(花)何だかお前の最前からお念佛を唱へて居
 るが妾の死んだ覺えの無い當前の人間だから心配せず
 入れて下さい(佐)へい其様ならお嬢さんの幽霊では其座い
 ませんか夫にしては表の方から御案内をなさらずに裏口
 へお出なされたの餘まり勝手を知り過ぎて……南無阿彌
 陀佛(花)サア其の不審の尤もながら宵の裡から此近所
 を彷徨として尋ねて見ても町名番地を知らないから如何
 しても這許が知れず實の死んで仕舞はふかと思詰て居た
 所ろ心切な車夫が優しく尋ねて呉れたから鼻緒屋の佐吉
 といふのを御存して有りませんかと別言葉さへ終ら
 ぬ内手前の宅は佐吉の裏で朝夕顔を合せますから家の勝
 手も存じて居れば御案内を致しませうと此の裏口へ連れ

て来たまゝ直ぐに其人の歸りましたるが爾ういふ譯ゆゑ裏
 手から忍んで来た疑ひを何卒晴して下さいませ(佐)成程夫
 て裏口からお出の譯は分りなから戸を開けるとお花
 で尋ねてお出の譯が無いと怖々ながら遠く離れて一心に
 は逢たさ懐しさに轉ぶが如く坐敷に駈込み突然佐吉へ絶
 り着くの佐吉は周章て突除けながら遠く離れて一心に
 む花の足を見て居ましたか幽霊らしい様子も無いので漸
 う胸を撫下し(佐)オ、貴嬢は正直のお嬢さんに違ひな
 いが如何いふ譯で今日まで御存生で御坐いますと佐吉
 は爺父から聞いた事を一通り物語り不審の廉を問糺すと
 む花は涙の顔をあげ(花)其のお話しを聞くに付け阿父さん
 やお母さんに御心配を掛けて濟ないが實はお前の云ひ

の通り一昨日の晩自宅を騒出しお前を尋ねて来る道で多
 くの犬に取巻れ跡へも先へも行けなから是非なく猿曳が
 に宿を頼み二階へ上がつて寐た處ろ枕が無いとて猿曳が
 下から持て上つた時隙間を漏るゝ夜嵐に行燈の灯を吹消
 されて黒白も分ぬ眞の問是はしたりと猿曳が探る手先に
 誤まつて側への柵の徳利や古火鉢が轉がり落ち大騒動を
 する中に火事だゝと遽かの人聲妻の裏の窓を破つて命
 からし逃伸びたが尋ねるお前の自宅は知れず上野への
 歸らねないから昨夜一晩駒形邊の宿屋に泊つて居ました
 のを死んだと云ふの何ぞの間違ひ併し夫が前兆て是非と
 も死なねばなりませまいと悄れ返つて物語れば佐吉は思
 はず膝を進め(佐)御両親様お申すに及ばす吾儕共に至るま

て最う此世に亡い人と諦めて居ましたのに思懸なく又
 こゝて御無事な顔をして拜しますの此上もない儀侍て目
 出度く祝ふが當然なのを到底死なねばならぬどの如何い
 ふ譯で御坐いますと云ふ顔情々打眺め(花)如何いふ譯と
 水臭い何の因果か此の妾の前を置いて餘所外の男に肌
 觸れまいと神を憐ひに立たから夫婦になれずば寧その
 と死んだが増しと覺悟して自宅を出た妾だから生残つた
 とて何のまア目出度い事が有りませう(佐)サア其所で
 御坐います娘心の一筋に爾う思召すのもお道理ながら實
 の近日貴嬢の位牌と手前と祝言する様にと親御様のお口
 からお依頼が有つた程ゆゑ死なずと如何か成ませう(花)
 エく夫此の妾を死んだと思召したから不便な奴じや

と仰しやつて爾ういふ都合に遊ばしたれど生て居ると分
 つて見れば一人娘に一人息子嫁に遣ても嫁に取つても就
 れ何方か血統が断え先祖に對して不孝だから又思切れ諦
 めろと意見を聞くは知れたこと其様な愛目を見やうより
 妾は死んで仕舞ひますがお前は互ひの約束を未練にも反
 古にして見殺しにする積りかへと怨みがましい縁言に佐
 吉は暫し兩手を組み黙然として居ましたが素より惚れて
 居るお花の言葉の皆道理の様に聞かますので若氣の至り
 と云ひながらツイ情死する氣になつて何かお互ひに謀合
 せ手に手を取て忍び出たのは實に痴情の極點で憫れむべ
 きの限りです

第十六回

芒尾花は無れども消元の出語りて睡りながら歩行いて
 来るのは芝居の道行で御座いますか扱實地に還て見ると
 些ども意氣な事は無く早く申せば狐から魅まれた様なも
 ので御座います勿論寅彦は保険附の野暮人て道行は愚か
 なあと女に側へ寄れてもソツとするど申しますと好いの
 か悪いのか知れない様ですが些と畑に無い意氣筋は申上
 るのが難澁てすから手取早く片附ますが昨日の紙上に書
 いた通りお花佐吉は手に手を取て例の道行と出懸たのを
 佐平は些ども存じません晝の疲れにグッスリと死人の様
 に寐込で居ると彼の小猿がチヨコと佐平の枕許へ遣
 て来て何か様子の子のありさうに手を引張つて起しますから
 (左)誰だく巫山戯るなど眩やきながら眼を覺し(左)オ、小

僧か何事だ飯櫃入の古いのを汝の寐床に遣てあるから彼
 許へ行って早く寐ろと言聞せても聞入れず頻りに裾を引張
 つて表の方へ指さすので扱は何事か有るさうだが畜生な
 がら感心に案内をする積りで有うと早くも其意を悟つた
 ので不審ながら猿に引れて往來へ立出でますと橋の欄干に憑
 立て息喘と吾妻橋まで参りまゝた但見ると橋の欄干に憑
 れ澄然と泣いて居るのはお花佐吉の二人ですから佐平は夢
 かと驚いたが若し幽霊が佐吉を連出し同じ冥土へ誘ふ譯
 なら滅多に手出しの出来ないと思はず知らず猶豫ひなが
 ら唾を定めて能く見ると正しくお花の影法師が月明りに
 映つて居るから扱は誠の人間かと安心する其中に彼方の
 二人の合掌して己に入水と見えまゝたから飛懸つて引留

め(佐)吉待てお感さんお待なさい早まつた事はせぬもの
 だど漸うくの事で押留め段々仔細を聞て見るとお花の
 決じて生命を落さず辛くも佐吉に環會ひ夫婦になれずば
 寧ろその事情死して仕舞はうと水の出端の若い同士とて跡
 先の分別も無く覺悟した由が分つたので佐平は頭を左右
 に打振り(佐)イヤハヤお若い御了箇貴嬢が御最期の由を聞
 て親御様は涙に暮れ切て佐吉とお位牌と祝言させやうと
 仰しやる程ゆゑ何のイサクサが有りませう此事は吾儕が
 屹とお保証申しまして御本望を遂げさせます若し又親御
 様が嫁には遣らぬと頑固な事を仰しやれば無理にも此方
 からお願ひ申して佐吉を御養子に致しませうから御心配に
 は及びませんと宥め購して二人を引連れお成道の非箇屋

へ行て有り様子物語ると兩親の喜びの筆にも口にも
 盡されず佐吉を養子にする事も異儀なく承知しましたか
 斯う纏まりが付いて見ると罪も無い彌次郎を暗い園園へ
 繋いで置くのは可哀さうな話したと早速お花が存生の由
 を其筋へ訴へたので彌次郎の嫌疑は晴れましたが分らな
 いのは血潮の一條で御座います警官方も不審に思つて再
 三彌次郎に尋ねると漸うく思出したと見ゆ横手を拍て
 申しますやう手前が箱根で猿を貰ひ猿曳となる其の以前
 は際物を商賣に致し去年の暮から春にかけ爪屋を始め
 居ましたので爪繪に遣つた煎じ蘇枋の餘りを徳利の中へ
 入れ二階の棚へ置いたまゝツイ失念して居ました其夜
 枕を持って上ると風に灯火を吹消され暗がりを探る機會に

何か柵から落たやうに心覺への有るを思へば下に滴つた
 血潮と云ふは繪の具の蘇枋で御座いませうと案の外の一
 言にサリと分つて下られましたか預り金五十圓の内十
 圓だけ濫用した廉は井筒屋で勘辨した上殘金の四十圓も
 冤罪をかけて氣の毒だつたと奇麗に彌次郎へ呉れて仕舞
 ひ佐平からも例の猿を彌次郎に返しまして圓く落着にな
 りましたスルト間も無く彌次郎方へ火を放た曲者も其筋
 へ上られましたたが是が即ち木鼠勘次で同人の申立に依れ
 ば其時狂火の中に包まれ赤子の泣く聲が聞けたので如何
 に惡黨の勘次でも惻隱の心黙し難く中へ飛込んで救つた
 ゆゑ折角放火した甲斐も無く仕事をする事が出来ず子供
 を抱へて情々ど松山町の宅へ歸ると隣に此頃移轉した夫

婦者に子供がなく是非慈しいとの依頼ゆゑ直ぐに連れ
 云ふ事を彌次郎が聞込んで同所へ尋ねて行くと彼の
 箱根の五平太夫婦が猿の一條から悟りを開き狩夫といふ
 罪な渡世は好くない事だと案じ付き東京へ出て松山町に
 住居して居る所ゆゑ益々奇遇を感じしが縁も無い他人と
 違ひ五平太夫婦と知れた上は我子を遣ても安心だと國藏
 を取戻しませず自分には元の猿曳となつて樂に暮して居る
 と云ふまさる日出度きお話しの是が結局で御座います

明治廿二年十二月二十日印刷
明治廿二年同月五日出版

淚香小史譯述

版權所有

版權登錄

編纂者

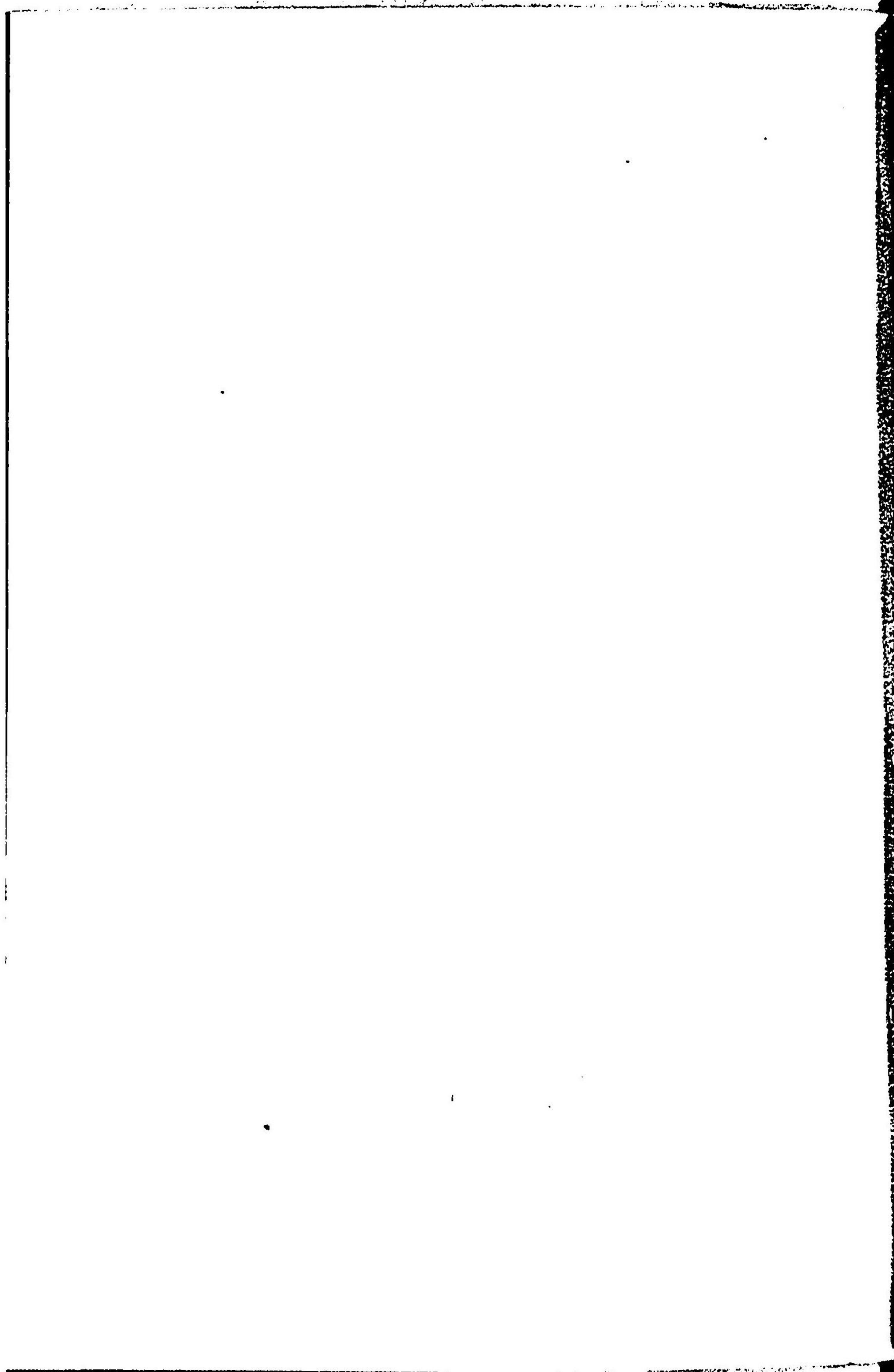
淺草區北三筋町三番地
岩本吾一

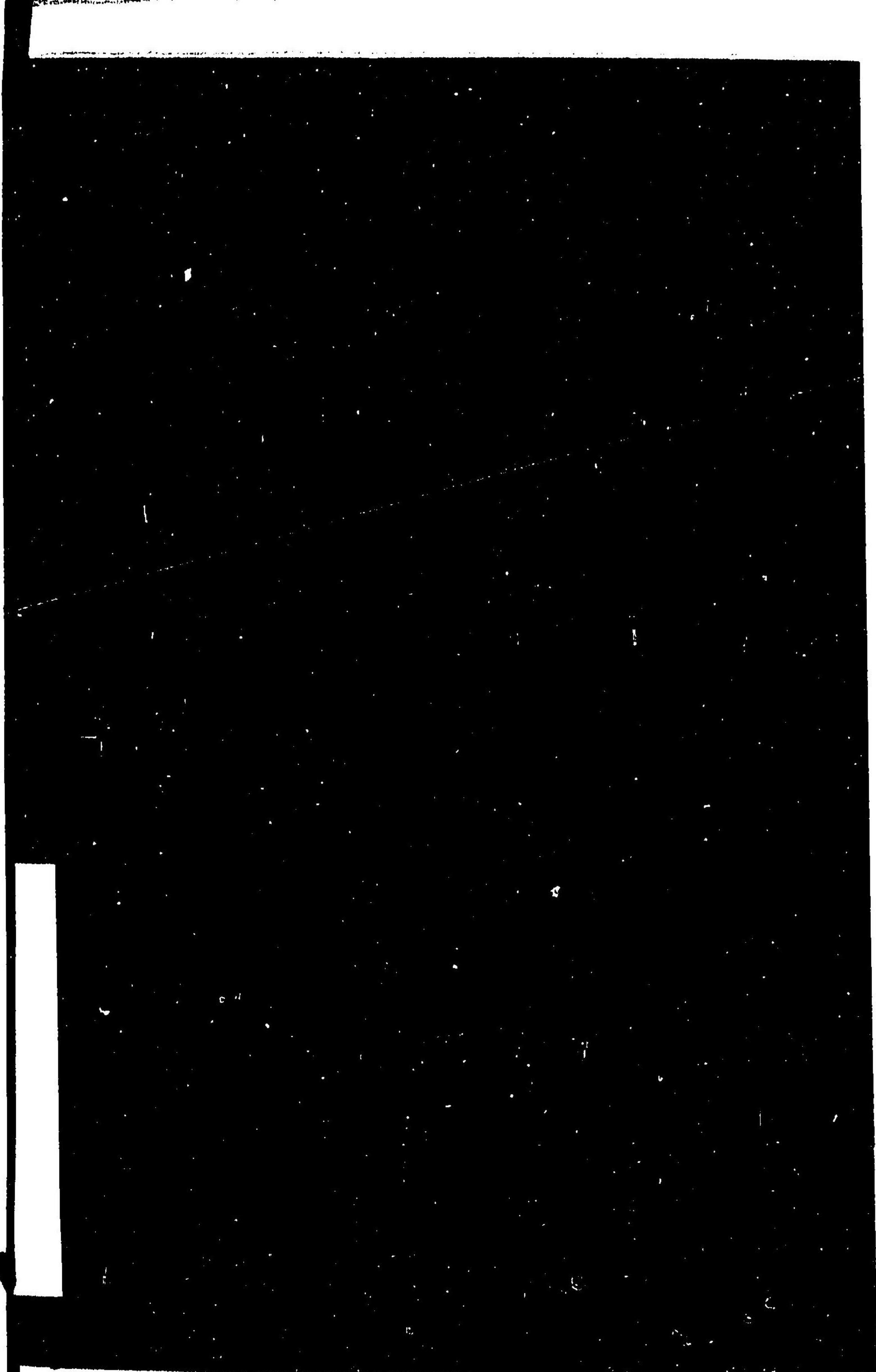
發行兼
印刷者

日本橋區新右衛門町十番地
町田宗七

發賣元

全所
扶桑堂





特 13

754

猿 曳

国立国会図書館

093872-000-0

特13-754

猿曳

柳嶋亭 寅彦 / 著

M22

DBQ-1305



